

負丈雜記

小袖
烏帽子

三

和書門			
二〇七八一	六八〇一	一六八〇	一六八〇
類	號	函	架
冊	架	函	號

内閣文庫			
二〇七八一	一六八〇	一五三	一七
和書	類	冊	架
類	號	冊	架

内閣文庫	
番號	和 20781
冊數	16 (3)
函號	153 278



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

雜紀身之



小袖靴の記

烏帽子靴の記

淺草文庫

Faint handwritten text in cursive script (sōsho) covering the left page, including the title '小袖靴の記' and '烏帽子靴の記'.



花廼家文庫
雑記

花廼家文庫

雑記第三

仙勢平彦貞丈記

小袖類之部

一 小袖といふ事 上古ハ裳末の下ヨリ着る衣位をウチキ襦トテ袖を
大ニしてひろ袖ウチキとて号スウチキ今ハ袖のチカクハ
對して帯の衣位をハ小袖と云フウチキ今ハ袖のチカクハ
袖を小シして袖下を大クウチキ今ハ皆小袖ト綿入ウチキ斗ウチキを小袖
といふハあやまらウチキ

一 袖のぬきと云ハ縮の着縮のたて糸を生糸ウチキとてぬきをハ
移り糸ウチキで織ウチキら拵ウチキ移りぬきウチキと云フウチキ今ハ文字ウチキハ練緯ウチキ
と云フウチキ今ハ九音ウチキハ練貫ウチキと云フウチキ今ハ文字ウチキの依ウチキ
ゆありウチキ今ハ拵ウチキ移りぬきウチキと云フウチキ今ハ文字ウチキの依ウチキ

尺素往來
練緯ト

祿りぬきの一めの祿りぬきとして二番五志らの祿りぬきを
今ハ志ららの一めと云の一めの祿りぬきを今ハの一めと云
云云ハ志ららるをのたる友の一めと云ひらるを今ハ志らら
の一めと云ハと云くあやまりし

一 志ららの祿ぬきハ昔を男も女も着る物の一めの祿りぬき
ハ男の着る物ハ何れハ御成次第故実云の一めの事男元
年よりたる人の自然正しくつらぬ女房元年ハ年廿八
迄ぬきハ五日ある年の時までぬきハ正しく後正しくぬき
貞実回今ハ 御家方の御定にて侍候上ハ志ららる用まより
栄ハのぬきを用るしナ粒のぬきもその時代々の御定ハより
事なれし是御家よりし

一 祿りぬきハあり節よりし。六ダリ。すぢ。紅梅。ぬき。白

をとのふと有りたる記

一 あり節と云ハ格も節をさく減たるをさく今ハの乃一めハ
徳のふも節を減るハあり節を徳のふも斗り減るハ左の

減節ハ熱解ゆらぬ節をありし

練書格子ヲ減ルヲ唐ヤ神ト云ハ福名年中行事云次練書ノ唐ト神ハ三ノ様而女房格
ハ可一

是ハ古ハ位なる中人あらしてハ是よりし。糸とゆふ女中元
もかじの減物とらまをせてハえぬ。ゆふは云云。又云。御免
までよりしをいぬ。ゆふ

一 ころりしハ紅格子ハ福名若年中のものと紅格子を有り地くれ
あつようしを織し是も若位の中房元元と云ハ是よりあり
御成次第古云云云。ころりしハ女房元元も中房元元ハこれ
ゆふもくは云くはせぬ。くはせぬハ花結と云ハ自然中房元
佐指ある也云々あり

の巾巾上をりおけい方巾巾のしんハ右の云々 地紅ニテ筋ノまハ
何れもすま

すぢりすすすぢりすも又ハ筋をたれ云筋を細ッ筋筋の如く
織らるを云々 中ノ箱ハウツシの織物 うちまをせてハ

ゆめーらりすハ筋をそとめハ筋物実云々 ウツシ

一 紅筋と云ハ タテ 徑糸ハ ヌキ 紫緯糸ハ ウチ 巾巾を織らるを云々 ハ筋

一 タテ 白と云ハ ウチ 徑糸ハ ヌキ 紫緯糸ハ ウチ 巾巾を織らるを云々 ハ筋

一 ウチ 白と云ハ ウチ 徑糸ハ ヌキ 紫緯糸ハ ウチ 巾巾を織らるを云々 ハ筋

一 ウチ 白と云ハ ウチ 徑糸ハ ヌキ 紫緯糸ハ ウチ 巾巾を織らるを云々 ハ筋

一 ウチ 白と云ハ ウチ 徑糸ハ ヌキ 紫緯糸ハ ウチ 巾巾を織らるを云々 ハ筋

ひとりのませ共ある(う)ひとませ共云ハ紅筋の筋とぬき白
の筋と一ツませに織らるを云即信古実云若きる斗てを
為すハ女房流ハ年あけても用る(う)

右よりしより巾巾下等織りぬきハ織物と云ハ
即成り来古実云男流の織物若らんす(う) ハ筋

と云ハハ男流云々織物と云ハ織物の筋巾ハ入らる(う) ハ筋

記ありす(う)をハ老らる(う) ハ筋

ありまの ハ筋 ハ筋

一 今腰うらり ハ筋 ハ筋 ハ筋

織物を腰巾斗り織らる(う) ハ筋

一 今の世嫁礼ハ時腰うらり ハ筋 ハ筋 ハ筋

輿あまし(う) ハ筋 ハ筋 ハ筋

地ノめと云物ハ筋を織らぬ ハ筋 ハ筋 ハ筋

之代ノめちと云(う) ハ筋 ハ筋 ハ筋

事をやり出さず法武の如くあるべし

一 少神ぬきと云ふは古に厨中にも少神ぬきは是は特采に能く
させられ海軍あるに少神をぬきて特采の中よりするべし

一 家の定紋と云ふは本に旗幕あるに付る志すべし孝子禊衣
少神あるに家の紋付るべし有り付の紋付多事たかも有り多
儀采の形に記す又孝子等云ふは公方標出殿と申す織物あは不定
白き物や又いあははむきを地を多し中條て出紋むらり
あるに付るべし

一 舊記に織物と云ふは紋うらを織たは練費も多しあるを織
たるは織物と云ふは前より記す又織物と云ふは度より後
より織物と云ふは物とあるもけり

古代の白
少神と
記す

一 儀采の下に是より少神のより孝子等書云大く記す

の時に又白き少神を記す一 儀あるし御成身身ある云
うら打の時あり物にぬきまゝと云ひこれの下にぬ
りんする少神あり是も不吉なりあり儀采と云ふは又向
一 ありの時は記す儀采の少神あるなり是は記す
の時に記す

云給は儀の給を本とす又男の儀のまれば白きと云ひこれ
一 羽腹と云ふは今の羽腹のより一 羽腹より多しまたは短きと云
一 羽腹と云ふは道腹ともつけ共それはいらぬ有り之道腹と云ふは

別之道腹は儀より下中ひきまて儀の形中ひきまては家
大納言坐の人なり是は記す

白袴と云ふは
八徳と云ふ物有り徳川記中か記の上中もつとくふかり衣
ありつけ貴人の出給く儀ありといふも又記すと有り八徳

特采の
記す

地ハ厚板ノ寸板ニ一ツラツテ金ノ糸にほつらへ
けり。織ノ糸ニ一糸を付て云々云々。第ハ一ツラツ
てハ慈恵院殿代ハ一ツラツト云々。人ノ糸ノ糸ニ一ツ
ハ一ツラツト幅を一寸ハ一ツラツト云々。人ノ糸ノ糸
貴族男女ハ一ツラツト云々。其ノ後ノ糸ノ糸ノ糸ノ糸
一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。

一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。
一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。
一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。
一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。
一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。

一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。
一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。
一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。
一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。
一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。

一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。
一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。
一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。
一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。
一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。

一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。
一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。
一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。
一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。
一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。ハ一ツラツト云々。

おきつきの
寺三
毛記ス

ぬきをきして赤衣をいふありぬき赤衣をきあつひ白少神
をゆらうすぬ白衣と云く武家ゆてもそんまて急向を
うり袴をきして上よはさあもひとれあてもきせし
てあを白衣と云く肩衣袴の時ハ肩衣をきせし袴斗
是ハ一ハ白衣之今時ハ袴もきせし少神斗是をも白衣
と云ハあやまり之ハ腰掛さぬをきやく急と云ハ赤袴之
一 そのつけの少神と云るハ年中恒例記ハ日新の部云女中
袴斗之因席付として文をあをく降る少神をきせらる
今日申是く云く文とハゆらうのゆきを云今少神と云物
あり 藍ゆて降たる少神の少神の事
法華人の事 横河記云願中免出かつき事多ありハ
宣りゆてきく古の記中の秋也何れとも忘れす古ハ何事も

あまうたくとてと物あられハ記中も今世のさみ歌中を
を因いたる種若年中の事に足利成氏の少神のゆきを
記しるハよゆが者或十人或八人又ハ六人何れも出長歌中
とて思布きてりて後の方をハ廣くして中一不斗り
とらたをくかり白少神は後には降る少神斗あまてた刀
をきくとアリけ出長歌中と云ハ少神の時斗りかある物ま
たり用る物ゆハあやらる

一 今世七月七日八月新々七月廿四日ハ必白くさひらをき
はる事 古ハくさひらハ白を布とてハる也 旧記ハ是ハ
字五右衛門介四郎太夫の白大袴をききり麻衣ハ後者の服と云き人の
多おハ非れた名の四郎太夫はまきりのまきぬきもあつたは袴斗と云りて
たりそめは志らうハ麻衣をききりてその用の袴斗は降る也ハ降る事
字五右衛門介四郎太夫はまきりのまきぬきもあつたは袴斗と云りて
白きくさひらをきとてハる也 旧記ハ是ハ
備川家の事 記云くハ白くさひらを

備川家の事 記云くハ白くさひらを



用ひず右中云く帷子ハ白を奉と云る由(古)ハ白みり由
白を巾ひ(ぬ)一(巾)白を限り漆帷子云々といふ事
白記由(ぬ)する白を巾ひ(ぬ)一(巾)或人の記由七夕
申元ハ朝は白く(巾)用る(巾)秋ハ金氣の節(巾)金の
白とす(巾)あ(巾)し(巾)け(巾)後(巾)あ(巾)まり(巾)成(巾)し(巾)け(巾)後(巾)の(巾)事
あ(巾)る(巾)ハ(巾)夏(巾)ハ(巾)大(巾)氣(巾)の(巾)節(巾)ハ(巾)大(巾)の(巾)文(巾)ハ(巾)希(巾)と(巾)す(巾)る(巾)由(巾)古(巾)日(巾)六(巾)日
ハ(巾)希(巾)き(巾)う(巾)し(巾)の(巾)事(巾)を(巾)用(巾)ひ(巾)事(巾)あり(巾)節(巾)あり(巾)一

一 何る後中給ハの(巾)め(巾)を(巾)布(巾)と(巾)云(巾)已(巾)し(巾)入(巾)の(巾)少(巾)神(巾)ハ(巾)花(巾)文(巾)の(巾)あ(巾)き(巾)し
少(巾)神(巾)を(巾)奉(巾)式(巾)と(巾)す(巾)され(巾)ハ(巾)今(巾)日(巾)移(巾)る(巾)必(巾)の(巾)め(巾)給(巾)九(巾)日
九(巾)日(巾)ハ(巾)花(巾)文(巾)の(巾)あ(巾)き(巾)少(巾)神(巾)を(巾)奉(巾)す(巾)事(巾)と(巾)い(巾)り(巾)け(巾)後(巾)ハ(巾)花(巾)文(巾)
の(巾)め(巾)の(巾)事(巾)ハ(巾)希(巾)き(巾)う(巾)し(巾)の(巾)事(巾)を(巾)用(巾)ひ(巾)事(巾)あり(巾)節(巾)あり(巾)一
云(巾)名(巾)月(巾)あり(巾)一(巾)奉(巾)公(巾)見(巾)燈(巾)記(巾)云(巾)九(巾)月(巾)九(巾)日(巾)より(巾)少(巾)神(巾)を(巾)奉(巾)ふ

一 昔時その付の(巾)少(巾)神(巾)ハ(巾)ま(巾)ま(巾)の(巾)事(巾)候(巾)事(巾)と(巾)あり(巾)事(巾)あり(巾)け(巾)の(巾)事
希(巾)き(巾)う(巾)し(巾)の(巾)事(巾)を(巾)用(巾)ひ(巾)事(巾)あり(巾)節(巾)あり(巾)一
少(巾)神(巾)と(巾)名(巾)別(巾)を(巾)定(巾)し(巾)る(巾)事(巾)ハ(巾)希(巾)き(巾)う(巾)し(巾)の(巾)事(巾)を(巾)用(巾)ひ(巾)事(巾)あり(巾)節(巾)あり(巾)一
一 四(巾)記(巾)ハ(巾)花(巾)文(巾)の(巾)あ(巾)き(巾)少(巾)神(巾)を(巾)奉(巾)す(巾)事(巾)と(巾)い(巾)り(巾)け(巾)後(巾)ハ(巾)花(巾)文(巾)
同(巾)事(巾)ハ(巾)花(巾)文(巾)の(巾)あ(巾)き(巾)少(巾)神(巾)を(巾)奉(巾)す(巾)事(巾)と(巾)い(巾)り(巾)け(巾)後(巾)ハ(巾)花(巾)文(巾)
と(巾)あり(巾)も(巾)ぬ(巾)い(巾)め(巾)付(巾)す(巾)事(巾)と(巾)あり(巾)事(巾)あり(巾)節(巾)あり(巾)一

一 阪金ト云事四記ハあり是ハ阪子金禰と云る(巾)事(巾)あり(巾)節(巾)あり(巾)一
二(巾)記(巾)を(巾)二(巾)よ(巾)し(巾)い(巾)ら(巾)る(巾)事(巾)ハ(巾)希(巾)き(巾)う(巾)し(巾)の(巾)事(巾)を(巾)用(巾)ひ(巾)事(巾)あり(巾)節(巾)あり(巾)一
阪子金禰と云(巾)事(巾)あり(巾)節(巾)あり(巾)一
按(巾)ん(巾)中(巾)ハ(巾)殊(巾)阪(巾)金(巾)一(巾)獨(巾)赤(巾)は(巾)花(巾)文(巾)ハ(巾)云(巾)文(巾)云(巾)是(巾)ハ(巾)阪
金の(巾)字(巾)ハ(巾)子(巾)の(巾)字(巾)を(巾)書(巾)く(巾)事(巾)と(巾)あり(巾)事(巾)あり(巾)節(巾)あり(巾)一

目結ノ
目結ノ
目結ノ

一 目結ト云ハ甚形回次目ノ形の如く是をいくらも散し
みハ並へて漆多し是を漆多ハ侂をつまこあげ多しとて
漆多結糸をとげも糸のあしりたる不白くぬて右の如く
目の根よあるゆゑ目結と云右の目結の漆物白星ま
たらば有て鹿の子の毛皮よ似る友かのこたえりうのこい
鹿の子之又佐々木氏の家の故を四月ぬいと云右の目結
を白く並へしと友四ツ目結と云

三浦家
の故コムラ
コウハ別の
フナリホ
ニテス

村濃と云ハ地をハ漆くして不て村雲の如く何多し
夫木抄快法伝作多田原いとの山のりみちをいふ漆れ村にありん
多を漆く漆多之緝村濃ト云ハ緝色もて村濃をつけ
又同抄あし入るの缺くれいとよりくる燕の上村こは花ぞ修染れらる
た多し漆多不の端ハ煙のこくもつす
さそこト云ハ何多し上の方のあをこくす
さその方をハ漆く漆くをさく種の色と我ご

案すそこ右の如也種あれいと遠たる多ありその種
軍用記中記を右多ありハ器之

貞丈云領

領ノ二字キクトト云モ子細アルニシテ
大志ほりを云ある多し領領の二字をまくとちとよむ

シボリ漆ハ水干多侂をのまくとちとち

あやまるとくしそめとよむを字あり
領領ノ二字ユワタトヨムヤ

夫木抄他記多あり

向手あやを多あり手他婚礼記はありさいひひ
考れも知る故あれと今た中修易をあらうと今

人の知りたる事をも書きまくとちとちあり後よ人の
知らぬ世の中よゆる世のいめし立もそ比人のつひよ
知りたる事を記し事とるが今用こまると多

馬にあらぬ花あるをさうてちん利にまくれあひ用ひるゝかゝ事と云も常糸のこまき
紅のなを甚こくして馬糸に物ありしを云馬糸は物ある
うすむらさきハ後々かんじむらさきハこまき糸とむらさき
のなこく馬糸に物ありたるを云濃紫糸と云ハ

あけト云糸も赤き糸を云緋の字をあけと種ハ紅藤之

を赤い色と云ハ紅藤之縹色と申す

うすまきと云ハ紅藤之色のつゆハ

真紅ト云ハまことの紅に染ト云事ハ何れハあはして紅に染

の似せ物何れハ人の紅藤ト云事ハ真紅といふ

地下の女の飯

一 女の帯一たる上巾小袖をとうちうけて見るとうちうけト云
今も帯大飯をのへうちうけて今に帯のへうちうけト云
ういとると云ふのも吉きと云ふんハこれハ法也といとりてう
あはと云ハうの打うけよつまをとりたるを云ハ小法白うい飯

あはと云も同事

一 いろハ形と云ハうろこ形のものをいふ共うろこ共云ハ魚のこ

けのりハ魚の鱗の重なりしハ形ハ此三角あるをそれ

を似せてハ此あるをいふことと云あり

一 少袖一重子と云ハ少袖二つのもの但少袖の袖を通して重ぬき

ハあはび二つの少袖を別々としてみて法と重ぬきを云ハ少袖

記ハ云ハ少袖をくはぬきハ少袖斗りハいくつものものを

びして同々ハよめもへし又書れ難ハ書云ハ少袖一重子

と云ハ給ハ不入者ハ少袖二つのもの少袖ハいくつもの

重ぬきハうられぬきとめいハ重ぬきハうられハ一ツたりてつこ重ぬ

き云ハ又少袖記ハ給ある重ぬきハうられぬきハ重ぬきハあは

せの重なりしハ二ツにしてハ重ぬきハうられぬきハ給ある時ハ給をハ

地下の女の飯
すろハ公家
カケタル種ヲ
ニナブモイナリ

ハ小神の内中神を誨し一重を給ハ少神威をとりぬ取まハ
入らぬ一重と云ハ少神ニツ積重あり

カ赤いのこ赤い一重の事鹿切と云衣肢を復ハ腰腰を巻くあり
冬ハこれを着て緋の袴袴を着るハ是林表子ガウシてハ新仕
御御禰禰洗洗を云ソヤ一ヨヨカカの事お武武あまあまてハハ一
ううぬぬカカとと一一白白すすくく女女友友装装采采圓圓武武云云鹿鹿切切ハハ新新仕仕
御御禰禰洗洗所所着着ししたたつつ手手冬冬紅紅袴袴表表白白袴袴一一つつううりり帯帯を
せせききそそ上上はは積積好好のの緋緋のの袴袴をを見見再再復復ハハこれこれをを腰腰巻巻とと云
表表白白はは一一纏纏をを金金銀銀いいろろののややううをを付付けけ表表白白きき積積
好好少少神神ののううつつままおおううけけてて肩肩ををぬぬいていて腰腰ままままううるととありあり云云
袴表子用とらうハハ少神は纏ふ
寶寶ははくく一一とと云云好好をを少少兒兒のの衣衣肢肢ののややううををととぬぬけけ付付るる事事

古ハあるきこの宝を一と云その古事よつて一と云お近世左

少神も何れも祝ひおハハ宝をを用る

一 古事よき先ののたたつたああれれ云云ははまま装装束束のの中中はは

一 ぬぬすす高高ハハ上上古古夜夜かかりりてて寝寝おおここととああおおののイイイイとといい後後ハ

おおままたたるるおおここふふ高高とと云云字字ハハ余余のの字字之之雅雅亮亮装装束束おお云云おおぬぬ

すす高高ハハおおののううちちハハ神神くくいいおお一一長長ととハハ又又ハハののううおお

乃乃おおここハハののううちちハハいいくれくれああのの禰禰りりととををああとといいららまま

てて二二筋筋ああつつててよよとといいららぬぬもも三三重重りりササ一一ぬぬああとといいををくくひひ

とと志志多多アアあありりててここああのの向向やや一一ひひとといいんん前前きき是是

替替申申のの法法ああままののううちちををとといいららぬぬハハ神神ああ一一志志とといいのの

如如くくはは角角ありありぬぬりりををとといいららぬぬハハ神神ああ一一志志とといいのの

一 かの事事のの志志たたののわわ一

禁裏
まは内神事
の始をせらる
るをいひ
上云お白布
ふ山あるのま
まてあつた
を指しお

一 のえきと云ふと云ハ春の比木の葉あのをりえおける時のまこ
されも蔭葉木多と云ふ蔭葉多と云ハあやまりこ木の
字を更へしゆえ木をりの中と云も蔭りこ又ゆえき
多を蔭みとりと云ふこくありしるを蔭みとりと云ふ
一 せり衣のり志のふりちすり花すり衣をこくありしと
まあり是ハ板まるの木花をあるの形を彫刻してひめ
のりを布よ包してを木のうこの上をのりを付おして
そま布又ハ布をとりけしてよくお付けハ木うこの不
るこあるこそれを藍の葉又ハ多この花を蔭ま布よ
すりハ裏列伝多郡ま石の面ハ布布を打ませ石のまめをすりおけるおをり
包して布布あるの面を蔭れハ多木あるの蔭あつるこ
一 蔭すりのま葉 聖書記をよお ト云ハ蔭の測蔭の形を記えお
こりしるをこくこくハ蔭のりまおのり蔭こくハまをり

一 かいひのつちうきたるあつせの己中うきしると云事古記
にありる我おはは 巻九ノ身
おまの糸 十席りその杖のままハ白中うし
おのこ中ふくく身たるはむちちとりのま葉を袖を蔭
て肩ようけ 中略 あ席り装束ハあおせの少袖の裾あうき
たるを袴蔭の用さにやきうらんうさおこのひいこれり
襟を二三つおま書きしるは緝地の袴のくまおるかよ
よせさせまき源平盛衰記 巻十五字作
川合戦糸 慶垂ハ白帷子の己中
うきしるは黄大口おてま六の巻 入道院糸
企の糸 けく一の帷の
眼かきたるは赤地の袴の裾ま葉まき号皆ま葉の下
よきしるは黄大口おてま六の巻 入道院糸
企の糸 けく一の帷の
あつたあつた右の服をねりあけてまきしるは黄大口お
ハ蔭たあつたあつた右の服をねりあけてまきしるは黄大口お

魚味ノ中
飲食ノ類
ニテリ又
成ノ神
アリニ

仁徳二年十一月廿一日
今日將軍家若君所着袴魚味之中略其後

一 仁徳二年十一月廿一日今日將軍家若君所着袴魚味之中略其後
着袴餘衣給之綿衣ハタノ入衣ニ著袴ノ二字ニテ今日始テ綿入
を着せ給ふ也左の若君ハ將軍家若君ノ御孫ナリ
三歳ニテ着袴ノ祝アリシナリ其時近ハ綿入用ナリシニ
上古ハ絹ヨリ平絹細絹廉絹是之也惠
令院爲正宣守の牛乳一海ノ藤苺と云書ヨリ
長絹の直糸長絹ノ特衣集ト云長絹ノ衣ナリ
太年記云長絹と云絹也縫ヨリ長絹二十尺長
絹二十匹あり車籠の中ニ入ルニ長絹
老スト
足ナリ

一 懐妊の婦人の腹帯をゆもい帯といふは祝儀の神に記ス
一 犢鼻禪の事犢ハ牛ノ子ト云テ牛ノ子ノ人の膝ニあり
へく不ぬゆり牛の鼻ノ似ル不を犢鼻と云ハ犢鼻ヲ以テ
とく祝の短き禪を犢鼻禪と云和名抄云禪方云注云
袴ニ而無跨謂之禪禪昆和名須方之毛能史記云司馬相如着
犢鼻禪韋昭曰今三尺布作之形如牛鼻者也此韋昭カ注ハ禪
形牛ノ鼻ニ似ル
ト右和名抄云禪字ラスモノ尺ノ下ニサキモノ尺ヨリテタフサキト云
訓ナシタフサキハ今ノフントシハ
禪トハ別ナルヲ知ヘシ源平盛衰記云治川先陣ノ条ニハタ
ハカニラハキトアルハ禪の字也短き袴也古人ハタカニナル時ニ必禪ヲク
ナリ禪ノ下ニハタノオビアリ
ト云

延喜式
縫殿寮式
袴二腰
中袴二腰
別ニ禪二腰
式ニ禪二腰
別ニ文ト見
ヘナリ

一 ちの帯の事和名抄禪ノ条下ニ唐韻云職容ノ及與鐘同揚
氏漢詰抄云松子
○毛乃之太乃。太不
佐波一云水子 小禪也ト見タリモの下のタフサキトハモといハ

禪の事ヲ指て云々禪の下のたふしと云ふ之は信布ヲ
禪子纏びて一幅のまゝあるを用ひ今ふんとしと云ふ
古はたつあとも後貞元系我抄まじりのあびとも沃婆阿等事
いひ又信ふとあびとも云おほ皆たあふまのりや顔り
松小禪也と云て唐にてハ松も禪の類して日本のたあふま
まハ合糸とも和名抄にハ松ハ禪のりまもく和日本のたあふ
ま禪のりまもく和名抄にハ松ハ禪のりまもく和日本のたあふ
ま禪のりまもく和名抄にハ松ハ禪のりまもく和日本のたあふ

禁式抄
日記三云内
ゆいハ八等
おの君はむえ
ゆハ大御方の
君ゆまの
すうしとの
まいあふ
さふし

一 今本と湯巻と同物イトユ音お通ユニキライニキ氏云大江山ユクト云
東鑑卷四十二建長四年壬子四月一日各御小袖十具御大寛治五年
唐織物御衣一領御胴衣一ツ今本一ツ略又菊花御衣寛治五年
五月十日中宮彰子
後一条院ヲ生ニ至テ条
云御ゆとの酒のゆとあり中
御房ニお白
装束ともしてゆとのゆのゆとありと云ふ同しゆゆと

禁秘抄恒例毎日 早且供御湯主殿官人奉行近代多クハ
允五位也 金殿
運湯中略ハ禁中著湯巻上臈入典侍一人也是候御
湯殿故也云壺井義知校正禁秘抄湯巻之傍白生衣シシキヤ
ト注シタリ貞丈云天子御湯ヲ召ス時上鶴一人典侍一人典侍二人御湯ヲ
メサスルニ常ニ衣ノ上ニ白キ生絹ノ衣ヲ着テ御湯ヲアヒセ奉ル
ナリ其白キ生絹ノ衣ヲ湯巻トモイニキトモ云
是ハ湯ノ溜ノ御テ衣ヲ濡スヲ防クキタメナリ
一 宿衣ト云ハ衣冠ノ事之禁秘抄上御膳事ノ篇宿衣トアルニ
壺井義知傍注ニ衣冠ノ事也ト見之タリ

一 時服の名目上右より有之續日本記卷十三云聖武天皇天
平八年冬十月戊申施唐僧璿波羅門僧菩提等時服
本今云凡親王年十三已上皆給時服一科春絶ニ足糸二約布四
端鉄十口秋絶ニ足綿二屯布六端鉄四挺ト見之タリ

六丈御布ト云モアリ
東ニ見ル

一 八丈御東鑑云入多ク守治拾遺ニモ見タリ是ハ今世ハ八丈御

延喜式
太政官
式三見

庭訓往来
尾張八丈
下
有

より出札物ハある程々すハ丈端ハ件豆の北条早雲
入道の時見付申して渡合せし也されハ古代ハ丈端ハ
端也古書ハ八丈端と云ハ是足の長サハ丈ハ織ハる端
の不尽りしある一早雲ハ八丈端ハ織リしハ後土御門院長享元年
字活指造物活巻ニ云才十八条利仁才一の八丈ハ一才ハ一丈と
ハ子とのに入てこそせき又巻ニ才一丈大左衛門ハ丈ハる者かと
あましよひ入てきぬお回くとり出てえやう之せしつ
物ともを之えき東鑑巻ニ奉送御幣物養紙指帖
八丈端ニ足右左を逐如件活巻五年五月十九日奉河
内貞代大中臣以通之回巻十二建久三年上京八丈端六足
代百廿文各廿文の庭訓往来云加賀ノ端丹後種好表
濃上京尾張八丈信濃布常陸袖ト見たり八丈端ハ古

尾張より出し其足長サハ丈アリシヨリニ八丈端
トハ名付シニヤ

一 望陀布ト云ハ古代上信國望陀郡ヨリ調物ト云リ
延喜式信濃寮云新嘗會御服中望陀布二條の和名
抄卷十二信布望陀布〇今按本銘或有庸布調布
讀豆波●沼能信濃望陀等名望陀ハ上信名也其
辨与他國調布頗列異故以所出四郡名爲名也
一 帖絹卷絹の事平クた、こゝを帖絹ト云九ク卷ハるを
卷絹ト云

一 六丈細布ト云ハ一足の長サ六丈ありしや今昔物物親書ニ
上人在俗の時盜賊を助ハる絹布ヲ切取ハハるハ門の服子多ハる皮子を三ツあハるハ
入てひらきさらん多よハハるハ文の綾十足黄八丈十足ハ端

八丈多
糸

百重入れり今ツルハ白き六丈の細布十疋緝布十疋
入り云々

一 綾き者の着る神衣と云物を古い自ら神衣と云神衣ハ衣の
自らあれい自らと云今著る集巻三十魚也禽獸の神ト宿の多る
てありと云布る物を足て襦を腰まさしてあるを
をあんきしりる

一 綿入の事ハ洛橋遺巻五大奈うすくの倫ニ又云移り久の
きぬの綿あつらあるニ三三坊院卷五文承蓮華王院供養
御幸を中路人あまい三輛ハ女房のこし入るみ衣之御車の
きりはくまつれ上上獨りの少やあせのみ衣
貞文云是ハ着花ニアラスウキイテトテ
車ノ簾外カサリテ見セテ出スヤリ

寸法雜々云
馬ノアカトリ
寸法ノ一ニ元
一寸布ニマ
ナリ又五尺
三寸モ布ニ
ツナリ何レ
モ備ハニ新
ニ付ルナリ

一 あかとりの事ハ女の服之傳束の後ハ汗衫ハ装束の事こと
云傳これもうここをあうとりト云事装束抄あまんへ
されハたりあまい不用之嫁入レ記衣傳のよよきのありとり也
八天抄寸法を二七尺二寸としとありて詳あるハ知れ
以難太平記世の記故殿笠符ヲ思案シ給ヒケルニ赤多ヲ馬
二付ヤトテ其後儀ニ付ラレ申右書肥ケ系合我ノ系又云渡河系系形十ヶ
所不領ハ後諸の恩賞之因入給シ玉ヒニ時我等少事
ノ初ニテ借シテ富士浅石の字ニ神拜の時神女詔シテ云遠近
因近シテ吾カ氏子欲カリシカハ赤後ノ軍の時我告シルハ知
ルト云リ入道及テ退テ何事ニカ候ラヒシシテ信信
ナラスト中信ヒシカハ笠幟ノウヲ案セシ時我者多ヲ賜ヒシニハ
後多クテ西ヲ賜リキト院定セシカハ故殿其時思念セテ女

追記

アカトリハ女
ノ馬ニ乗ルニ
鞆ノ上ニキ
ヲホヒテノル
○キシキ
備武家閑談
ニルケリ其
文別ニ記
梅ニ赤重
鳥ハ倭ノ字
ニテ実ハ赤

一垂ルヘ赤キ
脩ヲ鞆ノ上ヨリ
垂レオホフニ

ノ具ハ軍ニ忌事ソカシテカ思寄ケン誠ニ神の御謀ト信ラ
取リ給ヒシヨリ以來我オモ子孫モ必ス赤鳥ヲ可用ト仰ラレキ
右富士海間祓女 右ニ女ノ具ト云ルハ赤鳥をテテ云々右ノ
たゞ婚入ノ記ニテ云ハト云ヨリ推レハ女ノ衣服類ト云々
若ク形イウ有テ九志レモ狩野ヨリめテ返ル記云一
少袖を丸袖と云々あり 多鹿丸袖 元禄二年 記云丸袖と
扇ト太刀ノ人ノ云々云々後ヨリ先少袖の上ヨリ扇ヲ包テ
テ後太刀を出シ又云丸袖と記ト太刀を人ノ云々
一乃ニ後ヨリ少袖の上ヨリ後ヨリ包テテ後太刀を出ス云々
小袖を丸袖と云々事ハ裾袖ヲ封シテ云々小袖ハ表裏を具
者ラレハ袖ノ細クハ丸袖ト云々一名ヨリ裾ノ細クハ袖
ナリノ少袖ノヨリ貞順豹文言ニ云々云々ノ少袖ノ事云々

此種ハトハ人
依テ着ル物
ハサレト云
ナリ

貞順ハ房
袴ヲ着ル
一方を付
赤仕ル
初メトハ
初メ

依人袖ナハ近記ハト云々ナリナリノ少袖トハ袖ヲ
の表ヲサ藍子セリヤヲをナリナリト云々トハ本形ヨリ
花巻ノ形をナリナリト云々右ノ本形ノ上ハ袖をのせ藍ノ紫
又ハ色々ノ花を布ヲ包テ袖ノ面をナリナリト云々
あり是をナリノ少袖ト云々あり
左袖ノ少袖ハ紋ノ少袖ヲ腰をあくる所ナリト云々
貞順豹文書ニ云々紫ノ少袖ノヨリ一紋を付ルをハ者ル
紋のをハメナリト云々又紫も腰ナリト云々
右ノ袖ヲ白クシテ紫ニセザルハ袖ノ紫ナリト云々
略々ハ又記ナリト云々紫ノ少袖ノヨリ一紋を付ルをハ者ル
右ノ袖ヲ白クシテ紫ニセザルハ袖ノ紫ナリト云々
略々ハ又記ナリト云々紫ノ少袖ノヨリ一紋を付ルをハ者ル
右ノ袖ヲ白クシテ紫ニセザルハ袖ノ紫ナリト云々

斗白クニスルヲ云

何とやん 遠おト年又吳おト去ク異形ト云同シ

無返答ニ云男ハありすの 横ニ節ヲフトク あけて物ハ少神もす

の何事たる 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり

白くして居す云又 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり

ゆ漆又ハ小紋有と云漆たるを云あり

一 とうけ色の事貞順豹文書云あるをそのうの紫を物に又

人の好まよりして 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり

ありと云も 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり

みある多し漆する花虫のとうけのみに似しれとかけ

色とハ名付し 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり

貞順女房衣装次才云とかけ色とハ径を漆するもり急きしも志くと云
りぬ如子漆漆を横を赤く漆するもり急きしも志くと云

一 うり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり

あさきと 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり

とありかう 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり

漆 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり

筋と云あり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり

一 大牙 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり

ハ 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり

別 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり

の 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり

着 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり

ん

一 緋 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり 横ニ節ヲフトク あり

大字疑
久六方ノ
第拾七
七誤ルガ

大直物射方次云云文の九年八月所折夜初日所至葉片身取り乃年片に
馬年モエギニ引雨ノ所文云

大直物射方次云云文の九年八月所折夜初日所至葉片身取り乃年片に
馬年モエギニ引雨ノ所文云

大直物射方次云云文の九年八月所折夜初日所至葉片身取り乃年片に
馬年モエギニ引雨ノ所文云

大直物射方次云云文の九年八月所折夜初日所至葉片身取り乃年片に
馬年モエギニ引雨ノ所文云

大直物射方次云云文の九年八月所折夜初日所至葉片身取り乃年片に
馬年モエギニ引雨ノ所文云

織しるを云ふししくれお井筋を一名くれお井をちと平
りのちあり)

女房内記
云や房帷子
ヲ多しと係テ
為俗ニ地
白カテヒラト
云

一 地赤地黒地の帷子の事 慶申日記云六月一日何れあ
てくろくちにてしゆいひふ又七月一日何れあてくろくち
てもあんちくろくちも成かてひふ云云あてくちにてもト云
ハ地赤 紅のくろくちも白く挿糸ハ紋あるを挿糸を云
こくろくちにてしゆいひふ地黒のかしひふくち白く挿糸ハ紋を
とを挿糸を云ふあんちくろくとハ緋地白あるを地緋の
くろくちに白く挿糸ハ紋あるを挿糸を云ふ

一 小社帷子あるの事を記せし中申日記云と云ふの事
ついきりといふ所と云ふその事

一 すがしんのその貞孝翁に傳條云すがしんと申ハ
移りぬすおめてめてこまい事を述べたやうも

毎に入らすよあひにても又のそのの事ふちぞあてを
ませてぬい毛羽をおまふらうしんおめて白く裏いふゆも
あうまいの色あうくと挿糸裏ハありうむいハはけい
も平い志けあ一志けきぬめても挿糸つつけあり

一 所うしんのその慶申日記云初り 傳條云もく為ぬおを
して裏あうくくしてぬい

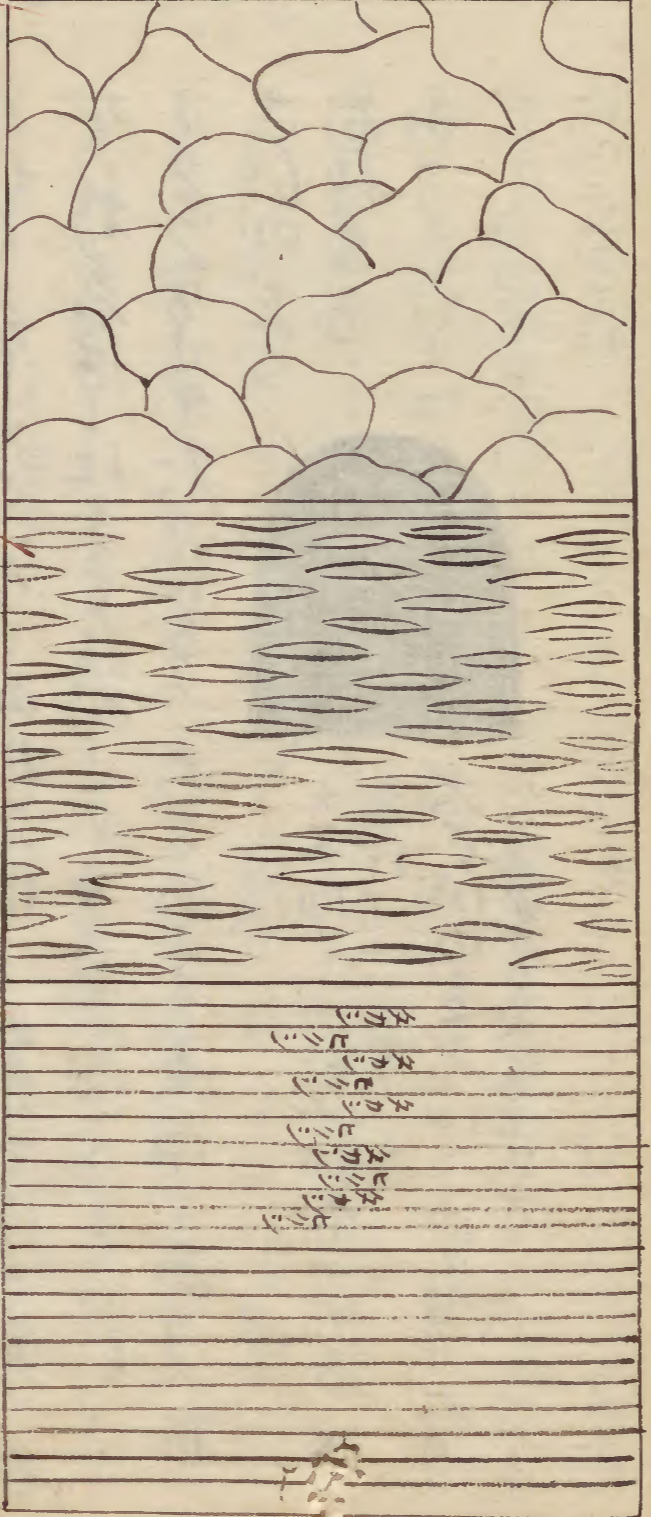
貞孝翁
衣装次云柳色トハ壁ヲモヘキニ際テ横ヲ白名ニテアリ

一 ぬすの白の事 前中記せぬすの白とハ別之享禄三年六月
上事及圖書云ぬすの白とハ今程の柳色之刻是ぬすの白く
白一そ、けぬすの白ハ地的の時装束の事しゆれ氏女房の
為申すぬすの白ある友け部日記をたかり前のぬすの白と
混すくうい

衣取令之礼服の各々ハ冠トアリ朝服ノ各々ニ頭巾トアリ此頭巾ニ羅ト慢トの二あり
 羅ハ貴クさび柳サビあともありたて向一をやらうる作時代
 慢ハ綾ニ
 此頭巾ハ
 後代ノ工
 ホウシカ
 一ハ向一
 を堅く仕
 作一ハ
 花屋ヲ名
 有仁公ヨリ
 作ル儘也
 陸奥後ヤ
 又ハ向一

今のせうくくゆる急ぼうこをてお、形を作て板まうる
 今さらめき中射してつぼく志まを作りくろ急向一を
 ハさびあるあさび急向一といひて日うちをたてく
 あろく一さらめき中射してつぼく志まを作りくろ急向一を

上古の頭巾ニ羅ト慢トの二ありエホシヲ紙ニテ堅ク作んニホサビを作テ
 今さらめき中射してつぼく志まを作りくろ急向一を



大きひめけ之岩石の
 面のゆくなくひき
 く定りし形をえ
 立急向一風折ホに
 用之

柳さひめけ柳の
 葉の形のみくろ
 くあましくはる也
 又柳竹葉のあ
 さまハ向一用之
 張急向一用之

横さひめけ横さろく
 ひましくろくをま
 ありまあ横を
 用之

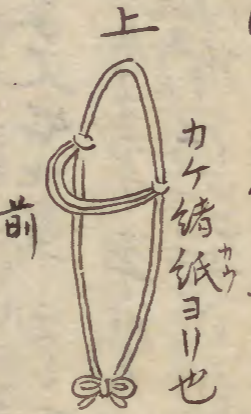
貞丈抄ルニ
 西三系性東
 抄云右眉
 左眉諸眉
 少諸眉名
 見多リ彼
 抄八道達院
 實隆公
 作之文故愛
 清禪諸
 額少諸額
 左より右
 名見之ヲ
 彼抄ハ三光
 院實隆公
 作之道達
 院ハ三光院
 ノ祖父之時
 代遠カス
 然レハ眉ト
 云額ト云
 計ハ通編ニテ新古今差別アルハカラス

是をまゆと云たうたうの方と出ーるハ片眉之ある方より
 ハ諸眉之片眉の内ニテたの方とあるハ左眉之右の方より
 ハ右眉之諸眉の内ニテある方よりあるハ左眉之諸眉と云
 見多リ彼
 抄八道達院
 實隆公
 作之文故愛
 清禪諸
 額少諸額
 左より右
 名見之ヲ
 彼抄ハ三光
 院實隆公
 作之道達
 院ハ三光院
 ノ祖父之時
 代遠カス
 然レハ眉ト
 云額ト云
 計ハ通編ニテ新古今差別アルハカラス

非ニエホシ
 名トコヨアリ



是ハ凡折之立返向一も眉の左下向一



けあしりハ眉をゆゑ之左右とも片方もあり

一 平礼^{ヒレ}為^レ向^トと云抽別^ニ智^ヲた^テ抄^ルハあ^ハは^ハ急^ニ折^レの^いい^まき
 山槐^記注
 美^四年^三月^を抄^ルて^ハあ^ハる^を平^レ礼^トと^云何^の急^折と^云あり
 四^日記^云今^日新^院令^着如^所烏^帽子^ニ無^殊儀^師大^納言^朝隆^季調^進之^八角^葎條^笠ニ^ココ^コ手^礼
 令^入○貞^丈云^此本^文注^立烏^帽子^ニ相^對シ^テ平^礼ト^云リ^此平^礼凡^折烏^帽子^ノフ^ラ平^礼ト^云ル^ル明^ナリ
 ○百^鍊抄
 室^元年
 五^月九^日記
 云^新日^吉
 五^月會^心
 へイ^ライ^ちと^よむ^ハ平^レ礼^トと^云何^の急^折と^云あり
 ヒ^ラレ^イ之^ヒと^シを^用て^ヒレ^ト訓^之是^レを^急折^と云^ふと^ハ

けは飛洋者惟久カカキシ後三年合戦ノ後ハ之ノタリ



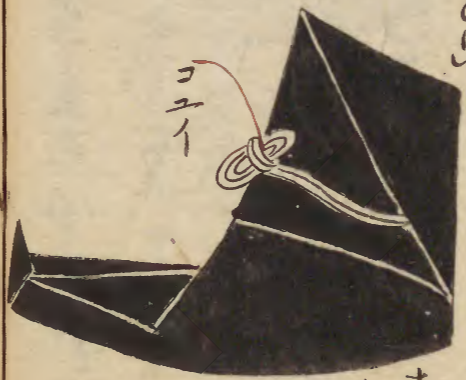
古代のこめいの袋

あめいハ緒ニあゆまし
ゆわし



前の袋

後の袋



あめいの
仕立下
に久島の
ことし

まゆきの中
袋のこし
モトよりコ入

まゆきに
穴をあけて
小緒の緒
を通すこ

古の人ハ月代そろりあぐ熱髪にてゆとりをいふまのまの中
よけて組緒の平キニテせく巻てちやせん髪ゆめいへん急何の
まゆきの袋のやくある中へゆとりを入れてあめいよまゆきに
ゆとりをあゆましてをくなくけ緒をせきれもる厚ぬけぬし

- 一 小緒ハ組緒ニあゆまして緒を各ハ何色とも不定又紙標にて小緒
をまゆき布衣記をいふゆとりはハが之ゆ候をいす時のよし
- 一 或西の時いてうけけしよの幸にハあめいこされハ小緒平ら
時いてうけけせすてうけけさる時にハあめいをいせさる
あり是古より法のし

あめいのは組ハ緒を各斗ニ筋標にてゆとりまゆけ一むまび
結ひして結ハニクミそのあまゆり緒の先を紙を細くして包こ
ひゆりて烏帽子の内より印へ門印てまゆきまゆけしてはこか
ゆ緒のまゆきこあをまゆきのたこゆ緒の結ハたこあ

左の方ハエホシノ冠ハハ

ヘシ
け不ヒトエムス

左ノ方ハ
エホシノ後
ハハ知ルシ

モトノリハニ子キノ中へ
入ルナリ



一 是向一の侍と云々の唯願の令示の趣意に於て我御禮卷六

たち也や内せん^{トララ}さけありもいそんとて是向一の侍、お
いそひいこれの意のん初申ははくろひき

一 前申記久く是向一に小侍とてうは無別之能々申件控カ下
徳入屋家々の記^考小為向一にはあゆひあましおこてうは
けをすそそのてうはけを急向しゆ折うけを今ハ

あゆいと申す身又按は後非之上右よりあゆいとてうは

けハ別也てうはけを折うけをあゆいと云にり向うは
てうはけを急向一け考そそ是は急向一の上よりうて

緒てうはけと云文字ハ頂願撰と書し御度撰と申クハ

非之項^考ハイタキ願カシラ之為伊一のいたき取の上より撰友

以願^撰と書し家々の記にてうはけハ一寸幅より白く黒ッ

打也下緒のこくと之但さけ緒よりハ細クうを多し又云馬

の尾ゆて折るを本^考又糸ゆて折るを本と云

はゆて折るを本と云

はゆて折るを本と云

はゆて折るを本と云

はゆて折るを本と云

正ホシトメ
目色ノ丸
組長サ
五寸斗

正ホシカケノ
長九寸六分
五寸斗幅
二分厚五厘
カ子サシ両面
同色身組
白黒一寸二タラ
ヒヤウモン
五分二タラ
白赤兼青
西端青
青トハ花
女色ノコキ
色成ヘシ

式部何しモ表裏同シホニテリ

取物別 陸ヤサレゆハ糸を本と申す其の尾ゆてするハ
あせをもちくとて用いる人もあり由道照見系 件控下たう
に足るなり又我御禮卷一すまゝの急向一併をばよく
解負願の記

一

右をさるくすくす平人のたをきんき、左折上は左折と云物
左折左折のりり花ゆ紀左をさるくと云ハ右肩のたをさるくと云ハ左肩のたを
右肩のりり花ゆ紀

細烏帽子ハ武官のりり也いんまこの細烏帽子
是もくくぬらすやいりりた平記巻上ニ花房遊世系
看智長走下折細烏帽子人等細烏帽子見しり也いりり
後三年合戦の修ゆ細烏帽子ありたる武者多くいりり

義家初は細烏帽子見しり神也

永仁六年八月五日
云殿上人
中政廿八
細烏帽子
其介三人
平礼又云新院脱履の後初平幸嚴親法皇弟在所平時公卿サ入之中七人引之烏帽子
十一人細烏帽子三人平礼○薩戒記應永廿二年
九月十日上皇弟幸東山泉涌寺布衣隨身三人
細烏帽子雜色立烏帽子也
○園大曆貞和四年五月廿八日一條院御細烏帽子
白襖御狩衣春宮大夫引之烏帽子園前宰相
細烏帽子大宮幸お細烏帽子別當平礼云

細烏帽子



右後三年合戦の修ゆ見之者へりナキモアリヘリヌリモ
アリ長筒ノ直垂又細烏帽子着タレモアリ袴細工也
着タレモアリ袴老ニタルモアリ

一 軍陣の時かたの下にかゝる細烏帽子のるりよむらまきを
とら付るりあり是古よりあるもの後三年合戦の

男がこれとをせ兼んそけ介古申あり

一 急向一のりしろの針をりしをりくくと云[●]け串は猿糸
の室生老吏の志始たる物取室生串と云由の従五位^一親^一
猿糸の志始めし物をとら家よをりひかへふに按多ゆ急向
一の筋さらんやうゆ既の上は保ちまなく箱の針あれは保上
串と云あるし但俗流しエホシトメト^云（^シ後世繕物作^トエホシトメ
トアリ）
一 ふくろの急向一のりし字活指違物作^{卷上オ}云^ナ七十余り斗りある
翁の髪もをけて志ろ申ひ布ふく海の急向一をり入れ
てをちいさきがいとさうかまうとるが杖ゆすうてあむ
き按多ゆ綾鞋好ゆて作んあ打急向一と云おは右の袋の
急向一と云物の類あつ

一 長急向一と云物古代ありしは急向一のせまを云れ

法少納^{ヒソカトナリ}云う枕多子^ヒ人^ヒゆああつらう物^ヒの類ニ云く
みそ^ヒうゆ志^ヒのひてくろあゆあう急向一^ヒ急てさす^ヒゆ人^ヒゆ
え^ヒとしまし^ヒい^ヒゆ^ヒる^ヒと^ヒに^ヒお^ヒゆ^ヒは^ヒせ^ヒさ^ヒり^ヒて^ヒそ^ヒよ^ヒろ^ヒと^ヒい
を^ヒせ^ヒし^ヒる^ヒい^ヒと^ヒう^ヒあ^ヒく^ヒ一^ヒ云^ヒく^ヒ自^ヒ又^ヒ云^ヒあ^ヒる^ヒ身^ヒに^ヒ繕^ヒゆ^ヒ急^ヒ向^ヒ一の^ヒせ^ヒま
を^ヒき^ヒし^ヒる^ヒも^ヒあ^ヒり^ヒ又^ヒお^ヒて^ヒま^ヒい^ヒる^ヒも^ヒ
あ^ヒく^ヒせ^ヒく^ヒさ^ヒう^ヒが^ヒい^ヒる^ヒも^ヒあ^ヒり^ヒし^ヒろ^ヒへ^ヒち^ヒく^ヒさ^ヒう^ヒ知^ヒる^ヒも^ヒあ^ヒり^ヒ是^ヒを^ヒ急^ヒ向^ヒ一^ヒ
急^ヒ向^ヒ一^ヒを^ヒお^ヒく^ヒる^ヒ種^ヒよ^ヒる^ヒめ^ヒこれ^ヒら^ヒを^ヒ急^ヒ向^ヒ一^ヒと^ヒい^ヒ云^ヒあ^ヒる^ヒへ^ヒ
一 急向一の恰好は横の度廿八寸あれは急の長廿八寸と
大小これゆ唯一知へ急の長廿八寸ゆるて急を斗りも
何らん長急向一ともいふべきれ
一 急向一の名不たゆれ

一 之元不^レ各所

凡折も同じ但折をせたる不をひきと云
左折は左のひれなる右折は右のひれなる

高倉家ノ説云



左一方ニバカリアルハ左眉又左より凡
云右一方ニバカリアルハ右眉凡右アカリ凡
云此圖ノ如ク両方ニアルヲモロコエ凡モロ
アカリ凡云小モロ眉ト云ハ両方少キ
高階ハ名ノミニテ分レズ

カサケキ
風口 エホシノシリカブリタル人ノ頭ヨリアリ
テウシロへ出タル所ヲ云下ニスキニアリ

綴言

エホシノ惣
解^クヒキ
ク^ク綴アルヲ
サビト云サハ木形
ニテウチ出スナリ

ハニタリノクホミ各所ヲ推^シボト云

一 長小佐の黒皆とありあり常照黒系^{科塔ち}云元服の時
長く^{長クミトハ長}黒皆ことあり長小佐を^{貞陸作}一神黒く

たるある

一 烏帽子の縁のそり烏帽子の緒を内より卯^卯川^川緒の
先をニツル^{ニツル}ひけてあきのあきに平らめて緒をるる
一遍上人^{上人}繪巻おほ烏帽子は緒を付^付るあり左の如し



一 烏帽子塗漆の事黒塗^{黒塗}掃^掃実サハシの三不有^{三不有}黒塗とハ
漆^漆を^を黒く^{黒く}は^はや^や五^五指^指巾^巾ぬ^ぬり^りたる^を云^云掃^掃実^実と^とい^いう^うる^るを^を
黒く^{黒く}あ^あく^くさ^さら^らく^くと^とぬ^ぬり^りたる^をサ^サハ^ハシ^シと^とい^いう^うは^はし^しま^まし^しは^はや
あ^あく^くさ^さら^らく^くと^とぬ^ぬり^りたる^を云^云サ^サハ^ハシ^シの^のそ^そり^り桃^桃花^花茶^茶葉^葉

云烏帽子尚家ハモ口額也甲申以後ヤウクサハスヘーキ
装束拾要抄云烏帽子宿老の人落塗仕年の人厚塗
近年不論老少薄塗ヲ着ス不可然事也云々
桃花菘菜葉ニ甲申以後トアルハ宿老ヲサシテ云々ある
されハ拾要抄ハ宿老落塗とあるを以て推シて此ハ
菘菜葉ノサハスといふハ落くさるとぬりたるを云へる
云々

雜記第三尾

